言語を学ぶ意味

LI校　高等部二年一組
ベンソン　アレックス

僕は現地校でスペイン語と英語を学んでいる。補習校では日本語を学んでいる。そこで、ふっと思うことがある。こんなに沢山の言語を学ぶ意味は何だろうかと。もちろん、人と情報を交わす行為、すなわちコミュニケーションのツールという大きな意味があるだろう。しかし、現代では翻訳機が非常に高性能であるため、一つの言語を使うことができれば世界中のほとんどの人とコミュニケーションを図ることができる。

新しい人と出会うためだという人もいるかもしれない。しかし、人との関係性を深めるのは会話ではなく、その人と一緒に過ごした時間や経験であると僕は思う。つまり、人間関係における言語の影響というのは比較的少なく、あったとしても間接的なものではないかというのが僕の推測だ。

では、言語を学ぶ意味は何だろうか。僕の考える答えは、「多角的な視点を身に着けるため」というものだ。色々な言語を学ぶことで、その言語を使う人々の総合的な価値観を直に知ることができるからである。僕がこれを実感したのは半年ほど前のことである。有名俳優のウィル・スミスが米アカデミー賞授賞式の生放送でコメディアンのクリス・ロックに妻を馬鹿にされ、クリスを平手打ちした時だった。僕はこれを見た時は、特に何とも思わなかったが、インターネットの反応を見ているとびっくりした。日本人はウィルスミスを称賛し、アメリカ人はウィル・スミスを批判していたのだ。同じ出来事に対し、二つの国で意見が二極化していたのだ。僕はこのニュースを聞いて、言語と文化が人々の道徳や価値観にどれほど相違が生じるのかを強く実感した。

僕はブルックリンで生まれたが、小学校一年生から六年生が始まるまで日本に住み、日

本の小学校に通った。中学から今、高二まではアメリカに住み、現地校に通っている。なので、僕は日本とアメリカという二つの国で育ち、日本語と英語という二つの言語を習得した。日本語には言葉で人間の上下関係を表すことのできる「敬語」というものがある。例えば、日本の学校で生徒が職員室に入る時は、「失礼します！」と言って頭を下げて入り、職員室を出る時には、「失礼しました！」と言ってまた頭を深々と下げて出て行かなければならなかった。それは、職員室にいらっしゃる先生方の時間、空間を生徒が邪魔をしに入ることを謝るというニュアンスが含まれており、「失礼します！」英語で言えば Excuse me for interrupting your personal space. という感じだろうか？　これがアメリカならもっとカジュアルな感じになるのではないか。そもそもアメリカの学校に職員室というものは存在せず、各教室が先生のいわゆるオフィス兼、教室であったり、あったとしても

teacher's lounge という感じで小さな部屋に数名の先生がコーヒーを飲んだり、スナックを食べたりするような部屋しかない。そこに生徒が何か用事で入るとしてもそれほど大げさな挨拶はしないだろうし、したとしてもHi, Can I come in?ぐらいだろう。その部屋を出るときには、失礼しました！に値するようなSorry for interrupting your coffee break!とまでは言わないであろう。

日本語の敬語には、日本の上の人を敬う文化が隠れており、日本語を学ぶと同時にそういう文化的背景も同時に学ぶことができるのだ。

僕が英語か日本語、どちらかしか使うことができなければ、どちらか一方の考え方や価値観に囲まれて生きていただろう。それを考えるととても窮屈で退屈な生き方だと思う。言語を学ぶことによって、その背景にある文化や価値観も学ぶことができる。僕はそれが言語を学ぶ意味だと思う。

祖父とｉＰａｄ

ＬＩ校　中等部三年一組

髙橋　勇登

僕は、日本に四人の祖父母がいる。みんな七十代の後期高齢者だ。スマートフォンやパソコンを使い、ビデオ電話で話したり、電子メールやＬＩＮＥで写真やテキストを送り合ったりしている。その中でただ一人、デジタルから遠く離れていたのが、母方の祖父だ。祖父は令和の時代になっても、パソコンどころか携帯電話すら持っていなかった。何度も祖母や母から携帯電話を持つように勧められても、「必要ない。ケータイは使わない。」と、かたくなに拒んでいた。

祖父にとって、僕はたった一人の孫だ。僕が小さい頃、祖父は毎年ニューヨークへ遊びに来てくれていた。また、僕とビデオ電話をするために、祖母のパソコンの使い方を母から習っていた。といっても、電源を入れて消すことと、スカイプのアイコンを開いて閉じ

ることだけだ。それでも、それまで触ろうともしなかったパソコンでビデオ電話ができるようになったことは、祖母にはかなりの衝撃だったようだ。祖父は、ビデオ電話で僕と話すことをとても楽しみにしていた。しかし、数年前に祖母がパソコンを新しく買い替えたことで、スカイプのアカウントやパスワードが分からなくなってしまい、祖父が自力でビデオ電話をすることはなくなった。

それ以降は、祖母のスマホでたまにビデオ電話をする程度になった。しかし、祖母はボランティア活動や習い事などで忙しく、いつも外出しているし、祖父と祖母の生活時間帯もずれているので、祖父と気軽に話せるタイミングがなかなか合わなかった。

そしてこの夏、三年振りに祖父母達に会いに、僕は日本へ行った。そこには、二年間ずっと小さい画面で見ていた祖父母達が満面の笑みで待っていた。久しぶりに対面して懐かしかった。みんな僕を見て、「大きくなった

ね。」と、とても驚いていた。やはり、画面の中で見るのと実際に会うのでは違うと思った。

今回の日本滞在で計画していたことに、僕の古いｉＰａｄを祖父に譲ることがあった。たとえ携帯電話がなくても、ｉＰａｄがあれば、祖父も以前のように自分でビデオ電話ができるようになると思ったからだ。

ところが、この計画は最初から少し難航した。基本動作と用語を覚えることが、祖父にとって大きなチャレンジだったからだ。「タップする」は指を画面に軽く触れること、画面を開く時に使う「ホームボタン」は下にある丸い形のボタンなど、何度も練習した。祖父はぎこちない指先で画面をタップするが、どうも難しいらしく、上手くできなかった。僕にとっては「そこでつまずく？」と思うようなことが、祖父には一大事だったのだ。

スマホもパソコンも持っていなかった祖父にとって、初めて持つデバイスがｉＰａｄと

いうのはハードルが高かったのかもしれないと、僕は心配になった。それでも祖父は、電源の位置や音量ボタンの位置など、一つ一つメモを取りながら、一生懸命覚えようと頑張っていた。

ニューヨークへ戻ってから、何度かビデオ電話で祖父と話した。最初はどうなることかとひやひやしたが、徐々に慣れていき、最近では自分でビデオ電話を終了するのも上手になってきた。たとえ話せる時間が短くても、毎回ビデオ電話がつながる度に、祖父の顔は嬉しそうだ。

僕は今回、祖父とｉＰａｄを通して、一つ気になったことがあった。それは、デジタル化が急激に進む中で、僕の祖父のように、デジタル社会に取り残されてしまっている高齢者が多くいるのではないかという懸念だ。

僕が毎朝見ているＮＨＫのニュースでは、たまにＱＲコードが画面の隅に出て、「詳しい情報はこちらから」とアナウンスされる。簡

単に情報が見られてとても便利だ。しかし、高齢者の中にはスマホを使いこなせない人や、デバイス自体を持っていない人もいるだろう。果たしてそういった高齢者にも、こういったサービスが便利で役立つと言えるのだろうか。

日本の総務省が発表した資料によると、平成二十四年度では、七十代の高齢者でインターネットを使ったことがある人は半数以下で、八十代以上になると四人に一人しかいない。高齢者のＩＣＴ利用率は年々増加しているものの、ＳＮＳなどの利用率はまだ低い。

国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）の報告書によると、世界で高齢者の人口が、他の年齢層に比べて急速に増加していて、人口高齢化が大きな現象になっている。今後、高齢者とデジタル社会をどうつなげていくかは、世界各国において、大きな課題になるだろう。

この夏、祖父はｉＰａｄと共に、デジタル社会へ大きな一歩を踏み出した。今はこの古

いｉＰａｄが、祖父と僕をつなぐために必要不可欠だ。

泣くこととは

LI校　中等部二年一組
マ　沙良

自分は昔から泣き虫だった。自分でもあまりにもバカバカしいことだと思っても、すぐに泣く自分だった。でも、それは家の中だけで、家の外では「泣き虫」の「な」の字も見せない自分だった。「泣くのは弱さを見せること。泣くことは恥だ。」と家の外で泣きそうになった時、必死に頭の中でくり返した。「泣くのは恥だ。泣くのは弱いことだ。」と。

そして事件は起こった。その日、昼休みにバインダーを校舎の庭に忘れてしまい、午後の授業が始まった頃に気付いた。窓から、自分のバインダーが庭に置いてあるのが見えた。先生に許可をもらい、メインオフィスに行き、バインダーを取りに行っていいですかと聞いた。「ランチエイドに見たかを聞くね。」と言われて、先生はランチエイドに電話をした。「バインダーは見てないってよ。」と言わ

れた。「外を確認していいですか。」と訊いた。バインダーは絶対に外にあると思っていたから、自分はそう言った。「外に行っちゃだめ。」と言われて、しぶしぶあきらめた。下校時に自分で取りに行こうと思った。

下校時になり、家庭の方に友達と歩いて行った。でも、そこにバインダーはもうなかった。紙切れがすこしばらまかれていただけだった。嫌な予感がした。再びメインオフィスに行くとバインダーが置いてあった。バインダーはボロボロで紙切れなどが飛び出たり、キャンディーのつぶが紙にくっついていて、その光景を見て頭が真っ白になった。

バインダーを先生から受け取り、下を見たまま、友達と待ち合わせをしていた図書館に向かった。でも、図書館に行く途中、怒りや悲しみがこみ上げて、友達のいる図書館に着く頃には、もう目から涙が落ちていた。恥ずかしくて、恥ずかしくて、友達の顔も見られず、自分の顔を隠すことしかできなかった。

「なんでこんなに泣き虫なんだろう。」としか思えなかった。

「泣くのは恥。みんなの空気を壊して申し訳ない。」でも、その友達は何も聞かずに抱きしめてくれた。そして、私は泣いた。その時、初めて「泣くことは恥だ。」の言葉が頭から飛んだ。泣きたい時は泣いていい。泣くには弱さではなく、自分の感情を表し、自分と向き合うことを表す。自分は今、この怒りや悲しみと向き合って、表現している。初めてそう思った。そして泣き止んだ後は、友達とバインダーを修理して、くだらない冗談を言い合い、悲しみを忘れた。

泣くことは弱さや恥ではなく、自分の感情と向き合い、浄化してくれる作用があると学んだ。

ミドルスクールの長所と短所

LI校　初等部六年一組

ベンソン　澪

私は９月からミドルスクールに入りました。まだ一か月も行っていませんが、私は今のところ小学校の方が好きです。でも、ミドルスクールもいいことはあるので、いい所と悪い所を比べてみようと思います。

ミドルスクールのいやなところは三つあります。一つ目は朝が早いことです。小学校へ行くバスは九時ごろ家の前に来たのに、ミドルスクールに行くバスは七時三十分ごろ来ます。私は寝るのがいつも遅くなってしまうので、朝早く起きるのがとてもつらいです。二つ目はふん囲気が冷たい感じがするところです。小学校は壁もカラフルで教室にはカーペットのエリアがあり、壁にもいっぱいデコレーションがあって、明るくて温かい感じがしました。でも、ミドルスクールは白い壁と青いロッカーが並んでいるだけで、冷たく感じ

ます。三つ目は授業が変わるごとに教室も移動しないといけなくて忙しいことです。たった四分しかない休けい時間でロッカーに行って、教科書などを交かんして、次の教室に遅れないように行かないといけません。友達と話す時間もなくみんな忙しそうに走っています。小学校では同じ教室で同じクラスメイト、先生と過ごしたので、ゆっくり話す時間があり、友達や先生の家族のこととか好きなこととか知ることができました。今は授業以外では、先生やクラスメイトのことは何もわかりません。それがさみしく感じます。

ミドルスクールにはいいこともあります。いいことは何か考えたら四つもありました。一つ目は色々なクラブがあることです。私は、マルチカルチャークラブ、ビジネスクラブ、ブックククラブ、ウクレレクラブ、ソーイングクラブなど、色んなクラブに入っています。クラブで新しい友達にも会いました。クラブはとっても楽しいから私は大好きです。二つ

目はランチタイムです。小学校の時はコロナが流行っていたので教室で食べないといけなかったけど、ミドルスクールに入ってからカフェテリアで食べられるようになりました。カフェテリアで小学校の時の友達と約束して同じテーブルに座っておしゃべりしながら食べるのがとても楽しいです。三つ目はミドルスクールには小学校になかった授業があることです。私が一番好きなのはＦＣＳ（家庭科）です。小学校ではできなかった料理や、裁ほうができてとても楽しいです。四つ目にいいことはロッカーがあることです。ロッカーにデコレーションをしたりして、自分の物が入れられる、小さな部屋みたいで好きです。

ミドルスクールはまだ始まったばかりだけど、これからどんどん慣れてきて、好きなところが増えてくるといいなと思います。そしたら、ミドルスクールがそんなに大変ではなくなると思います。

戦争はしちゃいけない

L1校　初等部五年一組

槇原　海

広島は、とても美しいところです。海と山があって、たくさんの人が住んでいます。でも、戦争中の１９４５年の八月六日に大変なことが起こりました。アメリカのB-29戦とう機が原子爆弾を落としました。多くの人たちが死んでしまいました。建物も全部はかいされました。三日後の八月九日には長崎に同じように原子爆弾が落とされました。日本は、その後降伏して、第二次世界大戦が終りました。

この夏、広島に家族旅行で行きました。僕のおじいさんは広島県で育ちました。原子爆弾が落とされた時広島市には住んでいませんでしたが、すぐ近くの尾道市にいました。一緒に広島市の原爆資料館に行きました。そこには広島の原爆についていろいろと記録されていました。いつ、どこに原爆が落とされた

のか、そして、被爆した人たちの経験が残されていました。その人たちが残したお弁当箱、服、影、絵、写真、手紙とかたくさんのものがてんじされていました。金属でできたがんじょうなお弁当箱には、何がはいっていたのだろう。それを持っていた子供達はお昼ご飯を食べれないうちに死んでしまったのだろう。僕は泣きそうになりました。どうして、こんな悲しいことがおこらなければならなかったのだろう。今でもこの作文を書いているときでも涙が出そうです。

一番心に残ったのは、佐々木さだこさんという女の子のお話でした。原爆でおばあさんを失ったときはまだ二才でした。放射能がたくさん入った黒い雨をあびました。住むところも失い、とても大変な暮らしでした。でも、学校で友達を作り、走るのがとても上手でした。数年後放射能のせいでとても悪い病気になり、病院に入院しました。さだこさんは「つるを千羽折ったら願いがかなう」といういい

つたえをきいて、体が良くなるように折りづるを千羽折りました。でもその願いはかなわず、十二才で死んでしまいました。

ぼくは原爆資料館にいった次の日の八月六日に十一歳になりました。佐々木さだ子さんは僕と同じ十一才の時に入院して八か月後十二才で死んでしまいました。そんなにすぐ、まだ小さいのに死んでしまったのがとてもかわいそうです。さだ子さんは白血病という血液のガンでした。原爆の黒い雨が原因だと思います。いたかったのに、苦しかったのに、みんなに心配かけないようにさだ子さんは、何も言いませんでした。強いなあと思いました。

戦争は、とても悪いものです。多くの人が死んだり苦しみます。今僕の住むニューヨークや日本では平和だけれど、ウクライナや、インドとパキスタンの国境地帯、アフガニスタン、エチオピアなどの国で戦争が今起こっていて多くの人が苦しんでいると思います。

みんなが協力して止められたらいいと思います。

おそうじ

L工校　三年二組

クロキ　アリア

わたしは、夏休みに日本へ行きました。日本で小学校の体けん入学をしました。小学校では、たくさん初めての事をしました。弟と二人だけで学校へ行ったり、きゅう食を食べたり、音楽のじゅ業でリコーダーをふいたりしました。

わたしが初めてやった事で一番楽しかったのは、おそうじです。今まで学校でみんなで一緒におそうじをしたことがなかったので、すごくびっくりしました。

まず、きゅう食を食べて少しする

16×16

とベルが鳴ります。そしたら、おそうじの時間です。自分のつくえを教室の後ろにみんなで動かします。空いた前の方をほうきではきます。ほうきが出来るのは、クラスで三人だけです。毎日ほうきの取り合いです。わたしも、ほうきをしたかったけれど、いつも負けてそうきんがけでした。

教室のゆかには、色いろな物が落ちていました。かみのも、消しゴムのかす、きゅう食で出た食べ物やストローのふくろ、ほこりもたくさんありました。毎日おそうじしているのに、きたなくてびっくりしました。きれいな教室で勉強出来るように一

生けん命におそうじしました。

バケツに水を入れて、ぞうきんをよくぬらします。そしたら、ぞうきんをしぼります。ぞうきんを使ったことがなかったので、全ぜん上手くしぼれなくて大へんでした。わたしのびちょびちょのぞうきんを見て、はるかちゃんが助けてくれました。

ゆかを一回ふいただけなのに、ぞうきんが真っ黒になりました。バケツの水もどんどん黒くなりました。ぞうきんがけは、大へんでした。でも、友だちとするおそうじは、楽しかったです。

あと、おそうじした教室がきれいなままでいられるようにしたいと思い

いました。消しゴムのかすは、集めてゴミ箱に入れます。きゅう食で出たゴミは、トレイに乗せて返します。わたしながんばったら、ちょっとだけ教室がきれいになりました。クラスのみんながんばってよごさなかったら、明日のおそうじなくなるのかな。

16×16

みどりのせかい

LI校　二年一組
川上かつや

六月二十四日、ぼくは、やくしまへハイキングに行きました。大さかからJAのプロペラきにのりましたは、思。てたより小さくて、ついらくしたらどうしようとドキドキしました。

やくしまの森は、小さい

川がいっぱいありました。

川の水に手を入れると、氷みたいにつめたくて、新しいガラスのようにとうめいでした。

ぼくが、川の水よりも、もっとすごいと思ったのは、森のやくすぎです。七本すぎという名前のやくすぎを見たとき、太さにびっくりしました。アパートみたいに大きくて、ぼくはその木

にすんでみたいと思いました。

どうしてこんなに大きくなるまで、長く生きられるのかなとふしぎでした。

ぼくが、

「めちゃくちゃ太いね。」

と言うと、お姉ちゃんが、

「やくすぎは、何千年も生きて、しんだ後、その上にもう一本の新しい木が生えて、ずっと生きるんだよ。」

と教えてくれました。

ぼく

は、やくすぎは、ふしぎがいっぱいある木だと思いました。

それから、森は石がたくさんあって、ゴツゴツしていました。石はこけが生えていて、みどり色をしています。木のみきもこけが生えています。森ぜんぶが、ほとんど、みどり色をしています。ぼくは、森にいる間、ちがうせかいにきた気もち

になりました。

ぼくは、やくしまはしぜんをまもっているとかんじました。そして、ぼくも、しぜんをまもりたいと思いました。やくしまみたいに、せかいをみどりいっぱいにして、しぜんをまもりたいです。